

## 自閉スペクトラム症児と保護者における遠隔システムを用いた言語・社会性支援プログラムの実践と効果検証

今福理博(武蔵野大学 教育学部 准教授)

本研究は、欧米を中心に有効性が実証されているProgram for Education and Enrichment of Relational Skills (PEERS®)を、日本の児童思春期の自閉スペクトラム症児と保護者を対象に遠隔ビデオツールを用いて実施するオンラインPEERS®を構築し、その有効性・支援効果を検証することを目的とした。遠隔ビデオツール活用によって自閉スペクトラム症児とその保護者に対して支援が行えるようになれば、利便性の向上には計り知れない効果がある。また十分な訓練を積んだ有資格者が実施を行うことで高い質の支援が全国で安定供給できることになる。さらに、自宅から実施が可能になると、その恩恵は大きい。

PEERS®のオンライン実施の報告は世界的にみても乏しいため、本研究テーマは、これまでの言語発達支援を拡張する新しい試みとしての貢献も期待できる。本研究は、児童思春期の自閉スペクトラム症児と保護者を対象に、遠隔システムを用いてオンラインPEERS®を構築し、介入効果を実証する点が新しく画期的である。児童期や就学前の保護者支援プログラム(ペアレントトレーニング等)の知見は蓄積されつつあるが、思春期のエビデンスのある介入アプローチは乏しい。

自閉スペクトラム症児は社会的引きこもり(不登校)を抱える場合が多く、支援へのアクセスのし易さは社会的課題である。オンラインPEERS®による発達支援の効果を実証できれば、全国の子どもと保護者に簡便に発達支援を提供でき、教育現場での発展性も期待できる。本研究は、PEERS®実施資格を有する児童精神科医という医療分野の専門家との共同研究であり、医学的な知見を教育分野に応用するための連携が可能である。PEERS®の効果を検証したエビデンスは豊富で、中学生・高校生の自閉スペクトラム症児の研究では、PEERS®支援を受けた子どもは言語・社会性や自己表現が向上することが明らかになっており、最新のメタアナリシスで子どもの言語を含む社会的スキルに大きな効果をもたらし、保護者による社会的スキル評価に中程度の効果をもたらすことが示されている。保護者についても、子どもの思春期の情緒や社会的孤立に関連する育児ストレスのレベルが低下し、精神的健康の改善にも効果があることが示されている。PEERS®には教師が行う学校版があり、本研究の応用として、教育現場での今後の発展性も期待されると共に、PEERS®のオンライン化でより広く対人スキルの向上やメンタルヘルスの発達支援を行うことができるようになる。

本研究は、思春期の自閉スペクトラム症児とその保護者を対象に遠隔ビデオツールを用いて実施するオンラインPEERS®を構築し、その有効性・支援効果を検証することを目的とした。12~17歳の青年15名とその保護者が本研究に参加した。各質問紙や評価尺度を点数化し、得点について介入前後でt検定を行い比較した。その結果、子どもが回答した子どもの強さと困難さアンケート(Strength and Difficulties Questionnaire; SDQ)の総合的困難さ、対人コミュニケーション質問紙(Social Communication Questionnaire; SCQ)、児童用抑うつ性尺度の得点が介入前よりも介入後で有意に低下した。子どものソーシャルスキルに関する知識(Test of adolescent social skills knowledge; TASSK)の得点が介入前よりも介入後で有意に上昇した。また、保護者のベック抑うつ尺度の得点が介入前よりも介入後で有意に低下した。その他の指標においては、介入前後によって得点に有意な差は認められなかった。

以上より、本研究はオンラインPEERS®によって子どもの社会性や精神的健康の改善、保護者の精神的健康の改善を認めた。今後より多くのサンプルを対象にオンラインPEERS®を実施し、その有効性について長期的な視野で効果検証を継続していく必要がある。